

大阪学院大学
外国語論集

第70号

前置詞への用法依存アプローチ …………… 黒宮公彦 1

抄訳・解説

パメラ・ジェーンズ著

『シェパーズ・ブッシュ——ディケンズとのつながり』前半

…………… 永岡規伊子 25

平成 27 年 12 月

大阪学院大学外国語学会

大阪学院大学
外国語論集
第70号

平成 27 年 12 月

大阪学院大学外国語学会

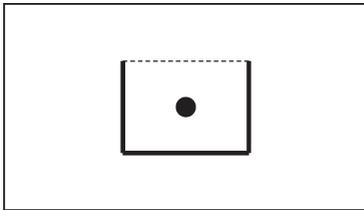
前置詞への用法依存アプローチ

黒 宮 公 彦

1. 前置詞の中心義を考えることに意味はあるか

認知言語学の分野における英語の前置詞の研究というと Tyler and Evans (2003) が名高い。これは人間の空間認知を前置詞の意味の基盤とし、その上で前置詞のプロトタイプの意味（厳密には「意味」というよりは「人間が認知した状況」であるので、Tyler and Evans (2003) では“proto scene”と呼ばれている。例えば in の proto scene は(1)に見るようなものだとされている) を考察した上で、その中心義から周辺的な意味への派生関係を分析した研究である。その一方で空間認知とあまり関係のなさそうな前置詞については触れられていない（もっとも英語の代表的な前置詞のほとんどに触れている）。

(1)



(Tyler and Evans 2003: 184)

このような研究は貴重で重要なものであろう。しかし、前置詞の習得に苦勞している日本の英語学習者を見るにつけ、さらにまた筆者自身もかつて苦勞した経験があることを思い出すにつけ、疑問に感じるものが二つある。一つは、このような中心義を知っていればその前置詞の全ての用法が予測できるように

なるのだろうか、言い換えると、ある前置詞を身に付けるとはその前置詞の中心義を知ることを意味するのだろうか、という疑問である。そしてもう一つは、第一の疑問とも関連するが、ある前置詞が用いられる際には、それがいかなる用法であっても、ネイティヴスピーカーの脳裏にはその前置詞の（単独の）中心義が（必ずしも(1)に見るようなスキーマではないのかもしれないが、いずれにせよ何らかの心的実在性を持ち、かつネイティヴスピーカーであれば誰もがほぼ同様のものを思い浮かべるような普遍性を持った存在として）思い浮かべられているのだろうか、という疑問である。

慌てて付言しておかねばならないが、Tyler and Evans (2003) が扱っているのは中心義ばかりでなく、そこからの拡張についても詳細に論じている。中心義だけで前置詞の全ての用法を説明できると主張しているわけではない。それでも上に述べたような疑問を抱かざるを得ない。なぜなら、おそらく英語学習者が知りたいことは「なぜ一つの前置詞に複数の語義が結びついているのか」よりはむしろ、英語を読む際に目にする前置詞が「いずれの語義で用いられているのか」、あるいは英語で書く（話す）際に「複数の前置詞のうちのいずれを用いて表現すればよいのか」であろうからである。これを(1)に見るような事態認知とそこから得られるスキーマ、そしてそれに基づく意味拡張で果たして説明しきれものなのだろうか。

例えば場所を示す場合、比較的広い場所は *in*、比較的狭い場所は *at* で表すとよく言われる。ところが「(アパートの) 102号室に住んでいる」と表現したいときは *live in room 102* と言い、*live at room 102* という言い方はふつうでないように思う。この理由をネイティヴスピーカーに尋ねたならば、おそらく次のような回答を得ることになるのだろう。すなわち、アパートの一室というのは確かに狭い空間かもしれないが、そこに住む人にとっては居住空間、言い換えるとその内部において「暮らす」という活動をする空間なのであり、だから *in* が適切となるのだ、と。これは非常に説得力のある説明であり、(1)のスキーマとも整合性が高い。しかし、これは我々がすでに *in* を用いるのが一般

的であることを知っており、受け入れているからこそ納得できるのであって、もし何も知らない状態で次のような説明を受けたのであれば *at* が正しいと十分に納得できるのではないか。すなわち、アパートという大きな建物があって、それをフレーム¹として、その中で私が住んでいる部屋はどこかというところ「102号室だ」と、大きな全体の中の一点を指し示す、だから *at* が適切となるのだ、と。

つまり、理屈など案外どうにでもつけられるのである。だからこそ非英語話者は *in* と *at* のどちらが正しいのか迷うのであり、*live through room 102* といったような明らかに誤りだと分かる表現で迷うことはないはずだ。明らかに誤っている表現は非英語話者にも誤りだと分かる、その点では非英語話者といっても事態認知に関して英語話者と大きな違いはないのであろう。しかし、*in* と *at* のように、非英語話者が迷うこともある。そして重要なことは、ある非英語話者にとって間違いやすい表現はたいてい他の非英語話者にとっても間違いやすいのであり、それにも関わらず英語を母語とする話者は間違えないということだ。これは何を意味するのだろうか。一つの考え方は、非英語話者が前置詞の使い方を誤るということはその人が前置詞の意味を十分に理解していないということであり、正確に理解していれば正しく使えるはずだ、ということだろう。しかし筆者はこの考え方には否定的である。この考え方に立つと「では前置詞の意味とは何なのか」が問題になるが、前置詞は様々な文脈で用いられるものであるから、それらの用法の全てに通底する中心義を求めようとすれば、それは(1)に見るような高度にスキーマ化されたものにならざるをえない。(1)はあくまでも Tyler and Evans (2003) が提案しているものに過ぎないが、それでも英語の母語話者でもある言語学者が提案していることも考慮すると、*in* の全ての用例に共通して認められる意味を最大公約数的に抽出して図示するならば、程度の差こそあれ(1)のようなものに落ち着くのではないか。そして(1)のような抽象化された図式が何を表しているのかと問われれば誰しも「何とでも解釈できる」と答えるのではないか。それはつまり、*in* と *at* のいずれが正

しいのかについて(1)の図式からは判断のしようがないことを意味する。(1)のような図式が表しているものなど何とでも解釈できるのだから、すでに述べたように、理屈などどうにでもつけられるというわけである²。

これは奇妙なことではないだろうか。英語の母語話者にしても、幼い頃から無数の実例を見聞きすることによって前置詞の意味を身につけたはずだ。ところが知っている実例が増えれば増えるほど、全ての実例に共通する意味は希薄になっていく。しかし実際には意味というものは見聞きした実例が増えるほど精密化されていくものではないのだろうか。

すでに述べたように Tyler and Evans (2003) は中心義ばかりでなく、その拡張についても論じている。しかし結局のところ、どのような状況で・どの前置詞を・どのように拡張して用いればよいのかが示されなければ英語学習者は前置詞を使いこなすことができない。意味の希薄なスキーマを中心義に据え、それが拡張すると述べるだけでは少なくとも非英語話者の学習の役にはほとんど立たないのだ³。

2. 前置詞への用法依存アプローチ

前節の問題に対して本稿が提案したいのは、前置詞の意味への用法依存モデル (usage-based model) に基づくアプローチである。用法依存モデルは Langacker (1990, 2000) などで提案されている考え方であり、端的に言えば言語に対するルールに基づく top-down 的アプローチではなく、用法に基づく bottom-up 的なアプローチのことである。これについて Langacker (1990: 265) は以下のように述べている。前節に述べたこととも深く関わっているため、少々長くなるが引用する。

(2) We know, for example, that speakers learn and manipulate specific expressions; but we do not know, in any direct way, precisely what degree of schematization they achieve, i.e. how abstract and general the rules are that they

manage to extract from more specific structures. I suspect that speakers differ somewhat in this regard, and do not invariably arrive at the highest-level schemas that the data would support. In any event, the omnipotence of high-level generalizations is not a matter of apriori necessity. Though regularities are obviously noted and employed in the computation of novel expressions, it is quite conceivable that low-level schemas are more important for this purpose than highly abstract schemas representing the broadest generalizations possible. If high-level schemas are extracted, they may be of only secondary significance, serving more of an organizing function than an active computational one.

要点をまとめると以下のようなになる。前節でも述べたことだが、概念はスキーマ化が進むほど抽象的になっていくので意味が希薄化してしまう。ならば文の生成や意味解釈に直接関わっているのは抽象度の低いスキーマで、意味の希薄化した高レベルのスキーマは様々な用法全体に統一感を与える役割しか果たしていないのかもしれない。したがって語の意味記述のためには抽象度の低いスキーマを重視すべきなのだ、と。この考え方は前置詞の意味について考察する際にはとりわけ有益だと思われる。なぜなら、具体的な物体を表す名詞などとは異なり、前置詞の意味はもともと抽象的で、かつ様々な意味に用いられるので、前節でも述べたとおり、全ての用法をカバーするようなスキーマを考えようとするとはそれは(1)に見るような極度に抽象的なものとならざるをえないためである。

しかし、では前置詞の意味において「抽象度の低いスキーマ」とはいかなるものなのだろうか。本稿ではそれは、前置詞を含んだ「コロケーション」(collocation。Sinclair (1991)、Hunston and Francis (2000)、Stubbs (2002)を参照)あるいは「構文」(construction。Goldberg (1995, 2006)を参照)だと考えたい(ただし本稿では以下「パターン」という用語を採用することにした⁴⁾)。すなわち前置詞をパターンの中に置き、前置詞を含んだパターン全体

を一つのまとまり、言い換えると「意味の単位」だと見なすのである。

何らかの事態を言語で表現することには、認知主体たる話し手が、自身が世界を認知した、その捉え方を言語で表現する、という側面も確かにあるだろう⁵。しかし言語にとってより根本的かつ基本的なことは、周囲の人々が使用する表現をとりあえず受け入れ、そうした表現をそっくりそのまま自分でも使う、ということなのではないだろうか。そして「なぜそのような表現になるのか」については各人がその人なりの理屈をつけて納得しているということなのではないだろうか。例えば日本語の「待つ」は「友人を待つ」のように対格(ヲ)を取る。対格は英語では基本的に直接目的格に相当すると考えていいだろう。ところが wait は wait for a friend of mine のように for を取る。同じ人間が同じ事態を認知して言語で表現しているのにもかかわらず、この違いが生じるのである。しかも日本語の話者はみなヲを用い、英語の話者はみな for を用いるのであって、母語話者の間では個人差によるばらつきが(おそらく)ない。これは、日本語話者は「〈人〉を待つ」というパターンを一まとめとして記憶し、同様に英語話者も“wait for 〈PERSON〉”というパターンを一まとめとして記憶しているからだと考えられる。「記憶している」とはつまり周囲の人々が使用している表現をそのまま受け入れ、丸暗記した上で自身も使用するということだ。その上で日本語話者ならば「待つ」はなぜヲを取るのか、英語話者ならば wait はなぜ for を取るのか、各人が各人なりの理由付けをしている(なぜなら、「待つ」がなぜヲを取るのか周囲の人々は誰も教えてくれないし、それどころか正解を知りもしないだろうから、各人が自分で考えて納得するよりない)か、もしくは理由付けするのをあきらめて記憶した表現をただ使用するかのいずれかなのであろう。そう考えると(2)で見たように Langacker (1990) が “I suspect that speakers differ somewhat in this regard, and do not invariably arrive at the highest-level schemas” と述べるのももっともであり、それどころか— Langacker (1990) はスキーマの抽象度の高低のみを問題にしているようだが— ある表現に対する理由付けが個人によってまるで異なる

ということすらあるかもしれない。少なくとも、たとえ日本語の母語話者であっても、「友人を待つ」と「ガラスを割る」とでなぜ同じワが用いられるのかについて自明だと感じる人はいないであろう。ならば、理由ははたかく「待つ」がワを取ることを日本語話者が受け入れているということが本質であり、「〈人〉を待つ」というパターン全体が意味の単位であると本稿は考えたい。そして英語の前置詞の意味を考察する際にも同様に、例えば“wait for 〈PERSON〉”というパターンを意味の単位と見なすべきだと考える。

実を言うと前置詞の意味に対して Tyler and Evans (2003) も用法依存モデルに基づくアプローチを採用しているのである。すなわち前置詞の意味は、その前置詞が用いられている表現が表す事態全体を見渡した上で考察しなければならない、という立場に立っている。だからこそ Tyler and Evans (2003) では認知言語学でよく用いられる「スキーマ (schema)」ではなく、すでに述べたように、proto “scene” という用語が使われている。この「前置詞の意味を理解するためには話し手が認知した事態全体を考察しなければならない」という考え方は極めて健全なものであろう。しかしながら、事態全体を一つのまとまりとして考察するのであれば、それに対応するのも「語」の意味ではなくパターン、つまり句、節、文といったものの意味でなければならないはずなのに、残念ながら Tyler and Evans (2003) ではあくまでも語としての前置詞の意味の考察に終始している。本稿が語のレベルでの前置詞の意味については考えず、パターン全体を一つのまとまりとしてその意味を考えるべきだと主張するのは以上の理由による。パターンから前置詞だけを取り出しても抽象度が上がるばかりで意味が希薄になってしまうからである⁶。

3. 考察

3.1 具体例

抽象的な議論が続いたので、ここで具体的な例を見ておこう。前置詞 with の用法を支えているのは次のようなパターンだと考えられる。

- (3) a. with 〈PERSON〉 = 「その人物と一緒に」
 b. with 〈INSTRUMENT〉 = 「その道具を使って」
 c. with 〈CLOTHING〉 = 「その衣類を身につけて」

お断りしておくが、これは with の用法を網羅したものではなく、具体例を示す目的でほんの一部を挙げたものにすぎない。〈PERSON〉、〈INSTRUMENT〉のように上位概念を容易に名付けられるものや、パターン全体の意味が容易に特定できるものはいいが、以下に見るように困難なものもある。

- (4) a. with ease, with care, . . . = (ある種の) 様態を表す
 b. (all) right with, wrong with, the case with, . . .
 c. start with, begin with, end (up) with, . . .
 d. argue [compete, fight, . . .] with 〈PERSON〉

さらに言えば、例えば with 〈PERSON〉のパターンに当てはまるものが全て(3a)の例だというわけではない。(4d)のようなものは(3a)と意味が異なる⁷ため、別のパターンだと考えるべきである。

3.2 問題点

本節では本稿がこれまで述べてきた考え方の問題点について考察したい。

3.2.1

まず、一つの前置詞に一つの意味が結び付いているのではなく、前置詞を含むパターンの一つ一つに意味が結び付いているという立場に立つと、覚えなければならないパターンが増え—必然的に前置詞の数よりも遙かに多くのパターンを記憶しなければならないことになる—脳の負担になるのではないか、という反論があるかもしれない。この点については用法依存モデルの提唱者である

Langacker 自身もよく承知していて、Langacker (1990:264) では用法依存モデルを“maximalist”の立場に立つアプローチだと述べている。実のところ多数のパターンや言語表現を記憶することが本当に脳の負担になっているのかどうかは甚だ疑わしい⁸。実際に脳が大量の言語表現を記憶することで我々の言語活動が可能になっているのであれば、それを認めるべきであろう。

3.2.2

次の問題点は、英語の母語話者は果たしてこうしたパターンを別のものとして認識しているのだろうか、という疑問である。例えば (3a-c) はそれぞれ別のパターンだと言われれば非英語話者は納得するかもしれないが、英語の母語話者は実際にはこれらを全て“A with B = 「A が B とともにある」”という1つのパターンで捉えているのかもしれない。とりわけ衣類はある意味で「道具」と見なすことも可能であるから (3b) と (3c) は同一のパターンと考えてもよさそうに思われる。

この点について考えるために次の(5)を見てみよう。これは *Peanuts* という漫画から引用したものである。この漫画の主人公 Charlie Brown は今テレビを観ている。そこに電話が掛かってきて妹の Sally Brown が出る。Sally は電話の相手に向かって次のように言う。

(5) No, my brother can't come to the phone right now. He's watching TV with a stocking cap. No, he's not wearing a stocking cap. He's watching TV WITH a stocking cap! Oh, forget it!!

(*Peanuts*, January 29, 1989, in *TCP*, p.13)

これには説明が必要だろう。Charlie はストッキングキャップをかぶってテレビを観ているのではない。Charlie の傍らには愛犬の Snoopy がいるのだが、この Snoopy が頭からくるぶしまですっぽりとストッキングキャップをかぶっ

ている — もしくは体全体がストッキングキャップにくるまれていると言った方がより適切な状態 — のである。なので傍目から見ると「Charlieはストッキングキャップと一緒にテレビを観ている」と表現しても差し支えない状況というわけだ。けれども電話の向こうにいる相手にはこれが見えないので、Sallyの“*He’s watching TV with a stocking cap.*”という発話を当然「Charlieはストッキングキャップをかぶってテレビを観ている」と解釈する。このずれが読者の笑いを誘うわけである。

この例から、英語の母語話者は *with a stocking cap* という句について「Charlieはストッキングキャップとともにある」といった漠然とした解釈をしているわけではなく、当然のように「ストッキングキャップをかぶっている」と受け取っているということが分かる。それは言い換えると、母語話者は(3a)の“*with* <PERSON>”と(3c)の“*with* <CLOTHING>”を別の事柄だと捉えているということである。その上で“*a stocking cap*”が人物を表しているという文脈を与えられた時にのみ *with a stocking cap* という表現は“*with* <PERSON>”というパターンに当てはまると解釈され、そうでない限りは — *stocking cap* は帽子の一種なのだから — “*with* <CLOTHING>”のパターンに当てはめて解釈されるのである。

念のために言うと、(3a-c)のいずれにも共通する特徴から“A with B = 「BがAとともにある」”という上位パターンを抽出することは可能であるし、実際おそらく母語話者の頭の中では *with* の意味としてそのようなものが思い浮かべられているのだろうと思われる。これは(2)で述べられている *highly abstract schemas* もしくは *high-level schemas* の一例だと考えていいだろう。ここで注意すべきは、(2)でも指摘されているとおり、このような上位パターンが抽出された後も(3a-c)は不要になるわけではなく、母語話者が事態を言語で表現する際には依然として(3a-c)のような抽象度の低いパターンが主役となっているのではないか、ということである。(5)はこれを実証していると言えよう。そうであるならば、(3a-c)はむしろ抽象度の比較的高いパターン

だとさえ言えるのである。“with a stocking cap”ならば通常は頭にかぶっている状態を表すが、“with (a pair of) stockings”であれば脚にはいている状態を表す。つまりこれらは異なった事柄を表しているのであるから、異なったパターンに属しているはずである。こうした抽象度の低いパターンが大量に記憶されており、我々の言語使用を支えていると筆者は考えたい。

読者の中には次のように反論したくなる人がおられるかもしれない。すなわち、with a stocking cap が頭にかぶっている状態を表すのは stocking cap についての知識から推論されることであって with の意味とは無関係なのではないか、with の意味に関しては (3c) の「with <CLOTHING> = 『その衣類を身につけて』」というパターンさえ記憶されていれば十分なのではないか、と。本稿はこの考え方は採らない。母語話者は何よりもまず、with a cap、with a stocking cap、with a baseball cap といった実際に用いられた表現を（おそらく多くの場合はそうした帽子をかぶった人を目にしながら）記憶していくはずである。その上でそれらの表現を通じて“with <CAP>”というパターンを（脳内に）創り出し、さらにその上位にある“with <HAT>”（この場合の <HAT> は頭を覆うためにかぶるもの全般を意味するとお考え頂きたい）といったパターンを創り出して、最終的に“with <CLOTHING>”にたどり着くのだと考えられる。そして、(2)でもほめかされているとおり、そうした上位のパターンが抽出された後も抽象度の低い下位パターンや具体的な表現がただちに不要となって忘れ去れるということはない。記憶されていたものが突然消去されるというのはそもそも不自然であるし、一度も使用されることなく十分に長い時間が経てば忘れ去られることもあるのかもしれないが、接する機会の多い、頻度の高い表現や下位パターンはむしろ時とともにしっかりと記憶されていくと考えるのが自然である。加えて(2)でも述べられているとおり我々の言語活動においてより重要な役割を担っているのはこうした下位パターンである。以上の理由から本稿は“with <CAP>”といったような抽象度の低いパターンを想定することは無意味なことだとは考えない。

そもそも前置詞は語と語をつなぐ役割を果たすのだから、前置詞の意味には「前後にどのような語が現れるのか」、そして「前後にどのような語が現れたら全体としてどのような意味になるのか」が含まれていなければならない。それは言い換えると、前置詞の意味は文脈によって決まる側面が大きいということである。したがって前置詞を文脈から切り離し、それ自体の意味について考えることこそあまり意味のないことなのではないだろうか。つまり *with a stocking cap* という句から *with* の意味だけを取り出して考えることはできないし、またそうする意味もないと筆者は考える。そうであればこそ “*with* <CLOTHING>”、あるいはもっと抽象度の低い “*with* <CAP>” といった、文脈を考慮した具体的な下位スキーマを単位として前置詞の意味について考察するのが有効だと考える⁹。本稿は前置詞を語というよりは形態素に近いものとして扱っている、と言ってもいいかもしれない。

3.2.3

前節で挙げた、衣類はある意味で「道具」なのだから (3b) と (3c) は同一のパターンと考えていいのではないか、という疑問について答えて一もしくは反論して一おこう。本稿は前節で述べた理由により (3b) さえあれば (3c) は不要だとは考えない。どちらも必要なパターンだと考える。

ただしこれは (3b) と (3c) を包摂するパターンを想定する、すなわち衣類を広い意味での「道具」と捉えることによって成り立つ、(3b) と (3c) の上位パターンとしての “*with* <INSTRUMENT>” の存在を否定するものではない。このようなパターンを考えても構わない(ただしこの “*with* <INSTRUMENT>” はあくまでも (3b) の上位パターンであって、両者は意味合いが異なることに注意しなければならない) し、このようなパターンを(無意識のうちに)思い浮かべている母語話者もいるのではないかと思われる。しかしながらいくつかに注意すべきことがあるように思う。

第一に、(2) は “*speakers differ somewhat in this regard, and do not*

invariably arrive at the highest-level schemas”と指摘しているが、衣類を道具の中に含めた“with 〈INSTRUMENT〉”という上位パターンはこのような high-level schemas の例に該当する可能性があるのではないかと筆者は考える。つまり全ての母語話者の頭の中にこのようなパターンが存在しているという保証はなく、個人差があるかもしれないということである。衣類がある意味で「道具」と見なすことが可能だということは、ある意味では「道具」ではないということでもある。ならば人によって判断や感覚に差があったとしてもそれほど不思議ではない。

これと関連して、第二に、「衣類」解釈と「道具」解釈が背反だと考える必要はない。二つのイメージが同時に喚起されても構わない。例えば“keep an eye on something”という句の on について考えてみよう。

- (6) a. keep on, go on, from now on
 b. She put her hat on. / The picture is on the wall.
 c. The wine is on the table. / The dictionary is on the desk.
 d. depend on, rely on

keep an eye on something の on は、ある意味で (6a) のような表現に見られる「状態持続の on」とでも呼ぶべきものだと思われる。しかし注視している物に視線があたかも貼り付いているようなイメージでこの句を捉えている人ならば、同時に (6b) のようないわゆる「付着の on」の例でもあると捉えている可能性がある。つまり複数のイメージが同時に喚起されているということだ。それはまた (6c) に見るような on の最も典型的だと思われるような用例でも同様である。ワインや辞書はテーブルや机の「上に」あるともテーブル(机)に「くっついている」とも言えるし、テーブル(机)がワイン(辞書)を「支えている」とも言える(この「支える」イメージは (6d) のような例に反映されていると言えよう)。そしてワイン(辞書)がテーブル(机)の上

に載せられた状態は何かが起こらない限り「持続」するものだ。このように(6c)の on は様々なイメージで捉えることが可能であり¹⁰、それは他の用法も同様である。例えば(6a)の「状態持続の on」にしても、2つのものがくっついて離れず、動かないからこのような意味が生じるのだと考えればこれは「付着の on」の一種だとも言える。そう考えると一つのイメージでしか捉えられない例の方がむしろ一たとえあったとしても一珍しいだろう。このように、話者の捉え方次第で複数のパターンが喚起されることはあり得るし、それによって言語表現をより具体的で豊かなイメージで理解できるようになると考えられる。したがって我々が衣類を道具の一種だと認識する場合、「道具を広い意味で捉えたならば、衣類は道具の一種だ」と認識するというよりはむしろ、「衣類は衣類である」という認識と「衣類はある種の道具でもある」という認識とを両立させているのだと考えるべきであろう。

そして第三に、衣類を衣類本来の用途に使用しても一 道具を広い意味で捉えれば一それは道具の一種だと言えようが、衣類を衣類としてでなく一つまり本来の使用法を外れて一純粋に道具として使用することも可能である。例えば“tie his hands with a stocking cap”のような例を考えればいいだろう。このように、衣類本来の用途はおおよそ決まりきったものだが、本来の用途を外れた道具として使用される場合の用途は多様であり、予想がつけにくい。文脈への依存度が高いと言い換えることも可能であろう。ここから分かるのは、一口に「衣類を道具と見なし、道具として使用する」と言っても、衣類本来の用途に用いるのとそうでないのとではそれに対する我々の認識が大きく異なっているということである。

前節で述べたことの繰り返しになるが、以上の議論により(3b)と(3c)とはあくまでも別のパターンであり、英語話者にとって両者はともに必要な知識だということが再確認できたことと思う。(3b)と(3c)を包含するパターンを想定することは構わないが、言語を運用する際に活用されるのは(3b)や(3c)、あるいはそれよりも抽象度の低いパターンだと考えられる。

3.2.4

用法依存モデルに基づいた、下位スキーマを重視する本稿は、いわゆる「語義の数え上げ (sense enumeration)」¹¹ の立場に立つものではないのかと批判を受けるかもしれないがそうではない。前置詞に限らず、「語の語義は一つ一つが独立したものであり、他と明確に区別できるものだ」とは筆者は考えないし、したがって語義を一つ一つ数え上げていくことができるとも思わない。しかし、語の中心義さえ分かっていたら他の語義の派生は規則として捉えられるという考え方も採らない。

例えば (4b) でも触れた **with** の用法について改めて考えてみよう。

(7) There's something wrong () my computer.

この空所に **in**、**on**、**at**、**to** といった前置詞が入ったとしてもそれほど不思議ではなく、そのそれぞれに理由付けができるように思われる¹² が、実際には **with** が用いられる。英語史的な説明はさておき、英語を母語とする現代の話者の言語感覚という観点からこれが **with** でなければならない理由を果たして示せるのか、筆者は疑問に思う。これは名義論的な視点から見ての話であるが、逆に語義論的に見ても、**with** の最も基本的な用法が「(何かが) 何かとともにあること」を表すことを考えると、この **with** の用法は他の用法から予測できない特異なものだといえる¹³。こうした他の用法から予測できない用法を中心義の拡張によって説明しようとする試みは不適切であり、ただ記述する他はないという考え方を筆者は採る。(4b) のような **with** の用法があると知った上で後知恵的に説明を加えるのはたやすく、例えば中心義とその拡張による説明も可能だろうが、何も知らない状態であれば、たとえ母語話者であっても (7) の空所を埋める適切な語が **with** だとは思わないだろう。何も知らない状態でも適切な語は **in** でも **on** でもなく **with** だと予測できて初めてそれは真の意味での「説明」と呼べるはずだが、この意味での説明は極めて困難だと思われ

る。そうであるならば説明ではなく記述をすべきだというのが筆者の考えである。

なお念のために付け加えると、語の創造性は当然認める。しかしながらそれは中心義ではなく、下位パターンに基づいて達成されると考える。例えば **stocking cap** が何か知らなくても、それが身に着けるものだと分かれば、それと “with <CLOTHING>” というパターンとから、**with a stocking cap** という句の大まかな意味は理解できる。加えてもし “with <CAP>” というパターンをすでに習得しており、**stocking cap** が **cap** の一種だと知ったならば、両者を統合することでより正確な意味が理解できるであろう。さらに(5)で見たように、**stocking cap** が「**stocking cap** に身を包んだ人物」を表しているという文脈が与えられたならば、それと “with <PERSON>” というパターンとから、**with a stocking cap** が「**stocking cap** に身を包んだ人物と一緒に」という意味に解釈可能だということも理解できる。語の創造性とは、語の意味が高度に抽象的な中心義から自由に拡張していくというものではなく、このように下位パターンに基づき、具体的で豊かなイメージを伴った小規模な拡張が起きていくことで生じるものではないだろうか。

3.2.5

本稿のような考え方に立つと「ある二つの言語表現に同じ前置詞が用いられていたとして、なぜ同じ前置詞が用いられるのか」という問題は考察の対象外になってしまう。最後にこの点について述べておきたい。

すでに述べたように本稿の立場では “with a stocking cap” と “with Snoopy” とは — (5) で見たような特殊な文脈が与えられない限り — 別のパターンに属することになる。したがって例えば “on the table” と “on Saturday” も当然別のパターンに属することになる。しかし、ともに **on** が用いられるからには何らかの理由があるのだと考えられる。では本稿は両者の関係についてどう説明するのか。

実のところ、この問題は本稿がこれまで扱ってきたものとは別の問題であり、したがって別の角度から考察しなければならないというのが本稿の立場である。確かに *on the table* と *on Saturday* とでともに *on* が用いられることには何らかの（少なくとも歴史的な）原因があるのであろう。そしてこの原因を突き止めるには、“*on X*” という高度に抽象化された上位パターンを想定し、その意味を解き明かすか、もしくは *on* の意味変化を歴史的に観察し、いかなる意味拡張が生じたのかを考察する必要があるだろう。その一方で本稿の、抽象度の低いパターンを重視する立場は、現在の一つまり *on* の歴史的変遷に関する知識を持たない一母語話者の言語感覚を問題としている。解き明かそうとしている問題が異なるのであるから、本稿がその両方ともに対して満足のいく解答を与えることはできない。「*on the table* と *on Saturday* とはなぜともに *on* が用いられるのか」というのは、これはこれで興味深い問題であるから、本稿とは別の方法を用いて解明すべきであろう。本稿は下位パターンを重視する立場を採るわけだが、下位パターンの記述だけでは複数のパターン間の関係は見えてこない。複数のパターンの間に関係を見出すということは、言い換えるとそれらのパターンに共通する上位パターンを抽出するということであり、上位パターンについて考察することも重要である。要するに高度に抽象化された上位パターンは言語現象の「説明」—もっともこれは前節で述べた、真の意味での「説明」とは意味合いが異なるが—に有効であるのに対し、本稿が重視する抽象度の低い下位パターンは実際の言語使用に有効なのである。両者は両立するのであって、決して排反的なものではない。

念のために付け加えると、これは同時に以下のことを意味する。すなわち、もし仮に“*on X*” という上位パターンの意味を解明し、それによって「*on the table* と *on Saturday* とはなぜともに *on* が用いられるのか」という問いに対して解答を与えたとしても、そのことは母語話者が言語を使用する際にこの“*on X*” というパターンを（無意識のうちに）脳裏に思い浮かべているということを保証するわけではない、ということである。

4. 最後に

「英語のある語を日本語に訳すと様々な訳し方ができるが、これは英語と日本語とのずれのために生じることであって、その語にたくさんの語義が結び付いているわけではない。母語話者の頭の中では語義は一つなのである。その一つの語義—つまり中心義—を正確に捉えることが英語の学習であり、そのためにも中心義を正確に記述するのが英語学の役目である」、従来はこのように考えられることが多かったように思う。この考え方はある程度は正しく、とりわけ名詞に関しては当てはまることが多い。しかしながら、本稿で確認したように、前置詞のような機能語は、たとえ中心義があったとしても、中心義の記述だけでは実際に使用できるようにはならない。また語の意味を「中心義とその拡張」という形で記述しようとする立場にしても、どのような状況でどのような意味へと拡張するのかが分からなければ実際の使用のためには不向きだと言わざるを得ない。

本稿はこのような問題意識から出発し、語の意味を「その語がどのような状況でどのような意味で用いられるか」までも含めて記述するためには語を超えたパターンを意味記述の単位としなければならないこと、そしてこの考え方はとりわけ前置詞のような機能語に関して効果的であることを示したつもりである。この立場に立つと、パターンの意味は記述されても語自体の意味は記述されないことになるが、3.2.5節等で述べたように、少なくとも前置詞に関してはそれで構わないと本稿では考える。母語話者は1つ1つバラバラになった語に接し、それぞれの語の意味を覚えるのではない。実際に使用される「語のまとまり」に接し、言語を習得していくのである。

注

*本稿は、日本英語学会第24回大会（2006年11月4日、於東京大学本郷キャンパス）で開催されたワークショップ「前置詞の意味・助詞の意味」において筆者が行った「前置詞への用法依存アプローチ」と題する発表に基づきつつ、大

幅な修正を加えたものである。

- 1) ここでいう「フレーム」とは Fillmore (1982) の **frame** のことであり、Langacker (1990:5ff) の **base** とほぼ同義である。
- 2) これは言い換えると、過度に抽象的なスキーマは過剰生成を許してしまうということであり、正しい意味記述と言えないことになる。
- 3) Tyler and Evans (2003) のみならず、語の意味を「プロトタイプの意味とその拡張」で捉えようとする認知言語学的研究はいずれもこの問題を抱えていると言えよう。
- 4) 「コロケーション」は「複数の語が並んだもの」という意味で用いられることが多い。逆に「構文」は「語とは独立にする、語の並び方の慣習的な決まり」という意味で用いられることがある。この点を考慮し本稿では Hunston and Francis (2000) にならって「パターン」という語を用いることにする。具体的には(3)に見るような、例えば〈PERSON〉のような語の上位概念を含めた、複数の語のかたまりを指す。
- 5) この問題については Lakoff (1987: Part II) が詳細に論じている。
- 6) 抽象度を上げずにパターンを重視すべきだという考えについては黒宮 (2010) も参照。また Sinclair (1991)、Hunston and Francis (2000)、Barlow (2000)、Stubbs (2002) 等も参照。
- 7) 厳密には **fight with** 〈PERSON〉は多義(「〈人〉を相手に戦う」「〈人〉とともに戦う」)であるので、さらなる条件を加える必要がある。
- 8) 脳の負担が増えることを経済的でないと断ずるのはあまりにも偏った考え方であろう。例えば人間の骨格や筋肉の構造はてこの原理から見ると大きな力を出さなければ動かせない作りになっている。これを力だけに着目して論ずれば不経済ということになってしまうが、実際問題として人間の体はそのように作られている。体を動かすために大きな力が必要となるのは確かだが、その代わり素早く動くことが可能となる。つまりそこには力と速度とのトレードオフがあるのであって、その全体を見る

ことなく経済性を論ずることは無意味である。筆者は言語もこれと同様だと考える。すなわち、大量の言語表現を記憶するのは脳に負担を掛けることになるが、その代わり早く話すことが可能となるはずである。我々の会話は、誰かが発話し、それを聞いて数分間考えて返事をし、相手も数分間考えてまた返事をする、という調子で進むのではない。テンポよく会話が進行していくのは大量の言語表現を記憶しているおかげだと筆者は考える。

- 9) なお、ここでは母語話者における心的実在性をもったものとしてのパターンについて考えているが、外国語教育や辞書の記述において「どの程度のレベルのパターンを教える（記載する）べきか」という問題を考えるととなると話は別である。そのような目的のためには“with <CLOTHING>”のレベルのパターンを教えれば（記載すれば）十分であって、“with <CAP>”のレベルのパターンは不要かもしれない。
- 10) こうした様々なイメージ、およびそれらと結び付いた抽象度の低いパターンは、前置詞の意味におけるある種のプロトタイプ属性（Taylor 1995, Lakoff 1987）の役割を果たしていると考えていいかもしれない。
- 11) Pustejovsky (1995:29ff) を参照。なお正確には Pustejovsky は “sense enumeration lexicons” と呼んでおり、これは「人間の心的辞書を語義の数え上げをしているものとして捉える、そのような考え方に基づいた心的辞書」という意味である。
- 12) 例えばもし in に違和感を覚える読者がおられたら、“I’m interested in linguistics.” はなぜ in となるのか考えてみられるとよろしいかと思う。それなりに理由付けができると思うが、それと同じ理由により (7) に in を用いてもおかしくはない、ということになるのではないだろうか。
- 13) with の最も基本的な用法は「A（名詞）が B（名詞）とともにある」のように 2 つの名詞の間の関係を示すことであろう。そうした観点から (7) を眺めると (7) の with は 2 つの名詞 something と my computer との関係

を示しており、一方で形容詞 *wrong* は *something* を修飾しているだけで *with* とは直接の関係はない、と考えることも可能かもしれない。しかし (7) とほぼ同じ意味で “*Something is wrong with my computer.*” とも言えることから考えても、(4b) で見たように *with* は *wrong* と強く結びついているというべきであろう。となるとこれは *with* に関してかなり特異な用法だということになる。

参考文献

- Atkins, Sue, Charles J. Fillmore, and Christopher R. Johnson (2003), “Lexicographic Relevance: Selecting Information from Corpus Evidence”, *International Journal of Lexicography*, Vol.16 No.3, Oxford: Oxford University Press, pp.251-280.
- Barlow, Michael, (2000), “Usage, Blends, and Grammar”, in Barlow and Kemmer (eds.), pp.315-345.
- and Suzanne Kemmer (eds.), (2000), *Usage Based Models of Language*, Stanford: CSLI Publications.
- Fillmore, Charles J. (1982), “Frame Semantics”, Linguistic Society of Korea (ed.) *Linguistics in the Morning Calm*, Seoul: Hanshin, pp.111-138.
- , Christopher R. Johnson and Miriam R.L. Petrucci (2003), “Background to FrameNet”, *International Journal of Lexicography*, Vol.16 No.3, Oxford: Oxford University Press, pp.235-250.
- Goldberg, Adele E. (1995), *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, Chicago: The University of Chicago Press.
- (2006), *Constructions at Work: The Nature of Generalization in Language*, Oxford: Oxford University Press.
- Hunston, Susan and Gill Francis (2000), *Pattern Grammar: A Corpus-driven Approach to the Lexical Grammar of English*, Amsterdam: John Benjamins.

- Kuroda, Kow, (2000), “Presenting the Framework of Pattern Matching Analysis”, *Conference Handbook* 18, English Linguistic Society of Japan, pp.5-8.
- 黒田航、中本敬子、野澤元 (2005)、「意味フレームに基づく概念分析の理論と実践」、『認知言語学論考』No.4、ひつじ書房、pp.133-269.
- 黒宮公彦 (2006a)、「多義性と文脈」、『日本認知言語学会論文集』第6巻、日本認知言語学会、pp.549-552.
- (2006b)、「前置詞への用法依存アプローチ」、ms、日本英語学会第24回大会.
- (2007)、“A Usage-based Approach to Prepositions”, Workshop Report, *JELS* 24, English Linguistic Society of Japan, p.253.
- (2010)、「〈移動〉の意味はどこから来るのか— off NP をめぐって」、『日本認知言語学会論文集』第10巻、pp.405-415.
- Lakoff, George (1987), *Women, Fire, and Dangerous Things*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. (1990), *Concept, Image, and Symbol*, Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- (2000), “A Dynamic Usage-Based Model”, in Barlow and Kemmer (eds.), pp.1-63.
- Pustejovsky, James (1995), *The Generative Lexicon*, Cambridge: The MIT Press.
- Sinclair, John M. (1991), *Corpus, Concordance, Collocation*, Oxford: Oxford University Press.
- (1996), “The Search for Units of Meaning”, in John Sinclair (2004), *Trust the Text*, London: Routledge, pp.24-48.
- Stubbs, Michael (2002), *Words and Phrases — Corpus Studies of Lexical Semantics*, Malden/Oxford: Blackwell Publishing.

Taylor, John R. (1995), *Linguistic Categorization*, 2nd ed., Oxford: Oxford University Press.

Tyler, Andrea, and Vyvyan Evans (2003), *The Semantics of English Prepositions*, Cambridge: Cambridge University Press.

引用文献

TCP = Charles M. Schulz, *The Complete Peanuts: 1989 to 1990*, Seattle: Fantagraphics Books, 2013.

A Collocation-based Approach to Prepositions

Kimihiko Kuromiya

Traditional researchers of English prepositions have a tendency to consider the purpose of their research as clarifying the core meaning of a preposition. This is often of little practical value to learners of English because it is too broad and also too abstract to specify the exact sense of the preposition in accordance with its context. This article builds on a usage based model (Langacker 1990, 2000) and proposes that attempts to describe the meaning of a preposition should also describe the collocation, i.e. the entire phrase, clause or sentence in which the preposition is embedded. Since a preposition is what combines a noun with another word (often a verb), information about what kind of word comes before or after the preposition, and the meaning of the entire phrase or sentence should be part of the preposition's meaning. We will see that collocation information is essential in describing the meaning of a preposition and that it is more important, especially to learners of English, than a preposition's core meaning.

パメラ・ジェーンズ著
『シェパーズ・ブッシュ——ディケンズ
とのつながり』抄訳（前半）

永 岡 規伊子

訳者解説

19世紀英国ヴィクトリア朝を代表する小説家チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens: 1812-1870) は、産業革命によって急速に都市化したロンドンの貧困や衛生問題をジャーナリズムに訴え、『オリヴァー・トゥイスト』『クリスマス・キャロル』など数多くの小説に、時代が生み出した人々の悲惨な生活を描き出した。一方、「知られざる貴婦人」と呼ばれるアンジェラ・バーデット・クーツ (Angela Burdett-Coutts: 1814-1906) は、若くして遺贈された巨万の資産を社会改良と貧民救済に充てることを使命とし、ロンドンのスラム改善と貧民のための住宅建設をはじめとする多種多様な活動を行った。また、英国女性の博愛事業の報告書を編集・執筆し、1893年のシカゴ博覧会で初めて開設された「女性館」に出展した人物である。¹

20歳代で出会ったこの二人は、貧しい人々への共感という点で一致し、数々の社会的な活動で協働したが、なかでも12年間にわたって心血を注いだ慈善事業が、「墮ちた女の家 (Home for Fallen Women)」の運営である。二人は更生施設を新しく建てるのではなく、「ユレーニア・コテッジ (Urania Cottage)」と名づけられた民家を改装し、その呼び名を引き継ぎながら、家庭的な「ホーム」の運営を目指した。それは売春婦、女性の犯罪者、貧困や虐待で路頭に迷った女性などを一定期間收容して教育し、当時イギリスの国策によってブームになっていたオーストラリア・ニュージーランド・カナダ・南アフリカへ移民として送り出すことを最終目的とする試みであった。

バーデット-クーツの伝記は1978年と1980年に出版され、2008年にはジェニー・ハートレイによって、植民地に渡った女性のその後の調査を加えた研究書『チャールズ・ディケンズと堕ちた女の家』が出版されている。²他にも、ディケンズ研究者によって、バーデット-クーツとの関係やディケンズの慈善観、実際の活動と作品との関連について数多く論じられてきた。そして本抄訳の元となるこの小冊子は1992年に出版され、ユレーニア・コテッジがあったウェスト・ロンドンのシェパーズ・ブッシュ郷土史学会で行った講演をまとめたものである。他の研究書同様に、この冊子に載せられた「堕ちた女の家」の運営、スタッフ、建物、入所者、日々の出来事は、すべてディケンズがバーデット-クーツに送った膨大な手紙を元としている。³バーデット-クーツからディケンズに送られた手紙はディケンズによって焼却処分されたため、これ以上の詳細を知ることはできなくなったが、それでも、全12巻に及ぶディケンズの手簡全集に収められたバーデット-クーツ宛ての手紙は、匿名で運営された「ホーム」の内容を知る上で貴重な資料であるため、ここでも多く引用されている。

全48頁からなるこの冊子は講演から書き下ろしたもののゆえに、論文としてのスタイルが整っておらず、文章の論理的な運びに欠ける箇所が多々ある。また、ホームの意義について問いかけを行いながら、その結論が不明瞭と言わざるを得ない。しかし、講演記録であるからこそ、ディケンズと慈善のテーマを研究する上でのコンパクトな概説書となっているとともに、「ホーム」の建物の納税記録、当時の地図、国勢調査に載った施設の入所者名という、地元の歴史学会ならではの新たな資料が載せられている点で重要な資料である。その意味で抄訳の価値があると考えられる。

またこの冊子には、バーデット-クーツの肖像画、1915年に写された元「ホーム」の建物の写真、当時の地図、ディケンズの小説『ディヴッド・コッパフィールド』に使われた挿絵、ディケンズ自らが編集した雑誌に匿名で載せた「家なき女の家 (Home for Homeless Women)」の記事の1ページ目のコ

ピーが掲載されている。

ここでは、紙面に制約があるため、他の研究書で頻繁に掲載されている内容の部分と、ディケンズの書いた女性受刑者へのアピールの大部分、またディケンズの雑誌記事から著者が抜粋した部分は省いて抄訳としたこととお断りしておきたい。

なお、年代等の明らかな誤りについては、訂正し、訳注に出典資料を記した。

また、本書に記載されたユレーニア・コテッジの教区税の記録を本抄訳前半の末尾に、1861年のセンサスに載った「ホーム」の入所者名の表を抄訳後半の末尾に付した。

抄訳（前半）

ユレーニア・コテッジ

1847年が暮れようとしていたある日、クラーンケンウェルのコールドバス・フィールズ刑務所で二人の若い女が待っていた。彼女たちが刑期を終えた後もそこに留まっていたのは、行き先として約束されていた「ホーム」の準備がまだできていなかったためである。それはユレーニア・コテッジと呼ばれ、ウェスト・ロンドンのシェパーズ・ブッシュ地区のライム・グローブにあった。

ライム・グローブは1950年代からBBCテレビの本拠地として、それ以前はゴーモン映画撮影所として有名であった。

しかしライム・グローブには、それよりずっと以前に「ユレーニア・コテッジ」「ディケンズとのつながり」という語るべき物語がある。

1847年の年末近くにディケンズは、ユレーニア・コテッジが「女性の更生と移民の試み」となる予定だと書いた。

恩恵を受ける対象となっていたのは、最初は、売春に堕ちた若い女性や、軽犯罪で刑務所に入れられた女性たちであった。彼女たちは改心して家事の訓練を受けた後、植民地で新しい生活を始めるために外国に送られることになっていた。

ディケンズは社会改革家で、社会問題に対する彼の態度は小説やその他の著作に明らかに示されているが、ユレーニア・コテッジでの彼の働きを辿ることによって、現実の世界でディケンズがそれをどう考えていたかを知ることができる。彼の著作がいかに真に迫ったものであっても、作品はフィクションである。ここでは、現実の問題に取り組んで活動するディケンズの姿を見ていくことにする。

その「試み」のための資金は、莫大な遺産を相続した博愛家のアンジェラ・バーデット・クーツが用意し、ディケンズがその管理・運用の役割を長年務めた。彼はミス・クーツに代わって、お金が浪費されることがないように、彼の言葉によると「アルゴス（ギリシャ神話に出てくる百の目を持つ巨人）のような」嚴重な見張り役をした。

それまでもディケンズとアンジェラ・バーデット・クーツは協力し、貧しい人々に提供できる唯一の教育手段であった貧民学校のための活動をしていた。

アンジェラ・バーデット・クーツに代わって、ディケンズはロンドンの最も貧困な地域の一つ、ホルボーンのスアロン・ヒルにあるフィールド・レーン貧民学校を訪れ、壊れた家の1階の3室が使われている現実を知る。彼はそのような環境で献身的に働く教師の並々な熱意に打たれ、ミス・クーツに経済的な援助を促した。ディケンズが最初に行ったのは、学校に石鹸と水とタオルを支給することであった。「まず子どもたちの体を洗うのが先決です」とミス・クーツに伝えている。

バーデット・クーツが売春婦救済のために、何らかのホームに資金を提供したいとディケンズに話したのは1846年5月であった。⁴彼は最初、彼女の名声に傷がつくのではないかと心配し、これまで取り組んできた貧民学校の支援や、ウェストミンスター地区の学校や教会建設の方に力を入れてはどうかと言って思いとどまらせようとした。しかし後に、「同じ女性であるあなたが始めようとするのであれば、その試みは受け入れられ易いに違いない」と考え、彼女に「全身全霊でこの仕事に取り組む」ことを約束した。

アンジェラ・バーデット・クーツ

アンジェラ・バーデットは1814年4月21日に、下院議員のサー・フランシス・バーデットの末娘で6番目の子どもとして生まれた。アンジェラの母親ソフィー・クーツはトーマスとスザンナ・クーツの末娘であった。スザンナの死によってトーマスはハリエット・メロンと再婚し、自分の財産についての全責任を彼女に託した。

ハリエットはトーマスの死後、銀行の共同経営者となり、クーツ家のメンバーから相続人の候補を次々と挙げてみては、さまざまな理由で退けていた。そして最後に彼女はバーデットの家系から候補を考えるようになった。アンジェラはトーマス・クーツを思わせる素質を持っていた。彼女はあまり美人とは言えず虚弱な体質であったが、静かで控えめな上に、優れた決断力を持っていた。彼女は社交の場でよくハリエットに同伴した。

ハリエットは1837年に亡くなり、アンジェラは23歳でクーツ家の財産を受け継いだ。それは祖父の銀行の半分の権利とピカデリーのストラットン通りにある邸宅であった。遺言では、彼女の名前にクーツという名前を加えるように記されていたので、彼女はバーデット・クーツとなり、後にクーツと名乗った。

金貨を並べると24マイル以上の長さになるだろうと当時の新聞が書きたてるほどの財産であった。遺言には、相続人は銀行の経営に加わってはならない、と書かれていた。アンジェラは、数多くの慈善の支援のためにその富を使うことにその後の人生を捧げることになるのである。彼女は自分が関わるすべての物事の背景を調べ、資金を供給するあらゆる事業の現状を把握していた。その範囲は、科学者の支援、教会建設、宣教師への援助、病人や癌研究のための活動支援にまで及んだ。彼女にとって最大の関心事は貧しい人を助けることであつた。人々は「貧しき者の女王に祝福あれ」と彼女を称えた。

ヴィクトリア女王は彼女の功績を認めて1871年に女男爵（baroness）の爵位を与えたが、その後1881年にアンジェラが秘書のアシュメド・バートレットと結婚した時に、女王はそれが「正気の沙汰ではない」と言ったという。彼女は

67歳で彼は30歳以上も年下だった。

この結婚の何年も前になるが、ユレーニア・コテッジの計画をしていた時期に、アンジェラは当時70歳代後半のウェリントン公爵と恋愛関係にあった。彼女の方から公爵にプロポーズしたほどだった。公爵は優しくそれを断ったが、彼が亡くなる1852年まで二人は親しい友人でいた。

アンジェラは財産を受け継いだ時に、ピカデリーのストラットン通り1番地に引っ越した。彼女が売春婦の問題に関心を持つようになったのはこの場所である。家のまわりの通りは女たちであふれ、彼女の家の戸口で客引きをすることさえあった。アンジェラはまだ年端も行かない娘たちの運命を気遣うようになる。1839年に彼女はチャールズ・ディケンズと初めて出会っていたが、この事実を知り、売春婦を救うために何らかのホームを設立したいという願いをディケンズに話すことになるのである。

1906年、アンジェラ・クーツはストラットン通りの家で亡くなり、安置された遺体は一般に公開された。一度に50人の人が棺のそばを一行となつて通り過ぎることが許され、週末に扉が閉められるまでに、あらゆる階級の人々が25,000人も葬儀に出席するために集まった。彼女はウェストミンスター寺院に葬られている。

家

ディケンズは「救護施設」の建物を新たに建設するつもりはなかった。ロンドン市内やその周辺には用途に合う家がたくさんあることを知っていたからだ。彼がミス・クーツに、シェパーズ・ブッシュのアクトン・ロード沿いに家を見つけたことを伝える手紙を書いたのは1847年5月であった。「片田舎ですが、快適な家で、庭と小さな芝生があります。税金はとても安いです」と書いている。

「馬小屋は洗濯場に変えようと思います。庭の周囲には垣根が必要です」。この二つの大規模な改修費用は50ポンドから75ポンドになるだろうと、ディケン

ズは考えていた。

家賃は年間60ギニーで、6年、14年、あるいは21年の契約期間で借りることができた。二人は先のことを考えて21年の借家契約をした。ホームの運営は実際には15年間であった。

ユレーニア・コテッジは、その地方にいくつかの土地を持っている老婦人のエリザベス・スコット夫人が所有していた。彼女は、その地域に住む地主として有名なスコット家の一員であったようだ。⁵ スコッツ・ロードはゴールドホーク・ロードの北に平行して走り、ライム・グローブの西にある。スコット夫人はシェパーズ・ブッシュのホワイト・ホースの近くに住んでいた。

ディケンズは、スコット夫人の事務弁護士で、ニュー・ボズウェル・コート社のホーキングズ、ブロクサム、ストックカーの三氏と「土曜日の2時から3時の間に」会う約束をした。彼らが書類の書き替えのためにミス・クーツの事務弁護士に契約書を送るよう依頼した時である。1848年の公式課税帳にある借地人の欄にチャールズ・ディケンズの名前が書かれているが、それは後に抹消されて、アンジェラ・バーデット・クーツと修正され、最後に登録されているのは1862年2月である。

ディケンズはスコット夫人に、その家を施設として使う予定であることは伝えたが、何の施設かについては話さなかった。彼は、「近隣で彼女たちがレットテルを貼られる」ことがないように、その用途を知られることを望まなかったからである。

ディケンズがミス・クーツに宛てた500通ほどの手紙が残っている。その多くはシェパーズ・ブッシュの「墮ちた女の家」に関する二人の共同作業についてである。これらの手紙が現存し、ディケンズが受け取った手紙と同じ扱いを受けることがなかったのは幸いである。というのは、ディケンズは自分の書簡が悪用されるのを恐れて、1860年にすべて焼却してしまったからである。

ディケンズは計画に取りかかった時から、家具や調度品の備え付けの細かい仕事や適切なスタッフ探しに奔走した。また、彼は収容者の募集も引き受け、

刑務所長と話をし、ユレーニア・コテッジに收容するのにふさわしい若い女性の推薦を依頼した。彼はミス・クーツへの手紙で、ホームの開設について多くの紙面を割いているが、それは当時彼女がウェリントン公爵を熱愛していて、ディケンズが会って話をするのが難しかったからである。公爵はミス・クーツに対して、「あなたが戸口で見かけた若い女性を救える見込みはほとんどない」と言ったが、それ以上計画を思いとどまらせようとはしなかったようである。

1847年8月26日付で、ディケンズはミス・クーツに、ホームを10月初旬までに使えるようにしたいと書いている。すっかり準備が整うまでは彼女がホームを見に来ないように願っていた。「ベッドの枠の取り付けは10日以上かかるでしょうし、その後もちょっとした作業があるでしょう」と書いている。

ホームが運営されていた間はずっと、ディケンズはお金がどのように使われたかをミス・クーツに知らせていた。彼は会計全般に関わり、1か月の請求書は41ポンドから43ポンドだったようだ。家政婦長にはかなりの金額が支払われ、5ポンドから、場合によっては50ポンドと金額はまちまちであった。

1850年9月22日付の手紙では、その前日にグreek通りにある下水局を訪ね、「下水溝について、いかにも悲痛な心に訴える請願を行った」とディケンズは書いている。監督官は彼に「連絡を取る」と約束した。この訪問は成功だったようで、1850年11月にロンドンの下水局から700フィートの下水パイプを敷設するという知らせが残っており、「チャールズ・ディケンズ氏」はそれに対して「75ポンド」を支払っている。当時このハウス—この書類ではマリア・コテッジと書かれているが—の排水は汚水溜めに頼っており、ニューロードとその頃呼ばれていたゴールドホーク・ロードにある一番近い下水溝までパイプが引かれていた。(1840年代には、グラント・ジャンクション上水道局がシェパーズ・ブッシュまで水を供給していた。)

下水の問題は繰り返し起こった。1857年の2月3日には、「シェパーズ・ブッシュの排水管が突然ひどい状態になって、收容者に病気が蔓延する危険が

あったため、建築業者にそのことを知らせました。土曜日ではありましたが、すぐに修理に駆けつけるようにと指示せざるを得ませんでした」と書いている。彼はその費用の見積もりが「30～40ポンド」であることをミス・クーツに知らせている。

ユレーニア・コテッジは、ディケンズの設計に従って1853年に拡張された。建設業者はキュービッツであった。

「ガスは門のところまで来ています」と、1857年にディケンズはミス・クーツに書いている。「それを家の中に引いてもらいたいと思っています。そして台所と洗濯場と風呂場と、それぞれの寝室の暖炉の上の天窓にガス灯の吹き出し口をつけることを提案します。そうすれば、明かりを持って歩かなくてもいいでしょうから」。

新しい浴槽が備え付けられ、乾燥室が造られた。ブルームズベリーの建築業者ウィリアム・ジークスは、「これまでこんなものを運んできて組み立てたことはありませんが、きっとできますよ。乾燥室は、6フィート四方で7フィートの高さがいい。鉄製で外は木で覆いましょう。乾燥装置を設置する場所で洗濯用の水を沸かすために銅製の洗濯用ボイラーを設置してはどうでしょう。そのままにしておけば乾燥室の余熱になってしまうだけの熱を使って、この銅製ボイラーに入った湯を常に熱く保つことができます。25分あれば乾燥室にあるすべての物を効果的に乾かすことができるので、日中は5分毎、20分毎に濡れた服や巻布などでいっぱいにしても大丈夫です。それにはおおよその見当で150ポンド、3週間で完成すると思います」。

これと同じ乾燥装置がもっと大規模に作られ、軍の病院用としてクリミアに送られた。

チャールズ・ディケンズ

このような多忙さにもかかわらず、ディケンズは、『バーナビー・ラッジ』『ディヴィッド・コッパーフィールド』『荒涼館』、そして『ハウスホールド・

ワーズ』という週刊誌の執筆に加えて、(ユレーニア・コテッジの設立に走り回っている間に)『ドンビーと息子』を書き上げている。しかし1855年に、彼は友人のウィリアム・ウィルズをミス・クーツの私設秘書に推薦した。これによって、細かい仕事の大部分から解放されたが、彼は委員会の会合にはその後も出席し、ユレーニア・コテッジへの関心を持ち続けた。

チャールズ・ディケンズは1812年2月7日に、エリザベスとジョン・ディケンズの2番目の子としてポーツマスに生まれた。彼の母親は有能な主婦ではなく、夫の収入以上にお金があると見せかけていたようだ。一方父親は愉快で気前がよく、お金には全く無責任であった。一家は経済的な問題でよく引っ越しをしたが、1817年までにはジョン・ディケンズはチャタムの海軍造船所で良い仕事を得た。それから数年間一家はそこで暮らし、チャールズは学校に通った。1822年にジョン・ディケンズはロンドンに引っ越すが、その時までには、一家の家計は再び逼迫していた。チャールズは学校に行けなくなり、12歳の時にストランドの近くのハンガーフォード・ステアーズにあったウォレン靴墨工場に働きに出された。彼は週に6シリングの給料で、一日に12時間靴墨の瓶の封をしたり、ラベルを貼ったりして働いた。彼はその仕事も、仲間も、自分が置かれた状況に対しても嫌悪感を持ち、学校に行けなくなったことに激しく憤った。

1824年にジョン・ディケンズと妻と小さな子どもたちはマーシャルシー債務者監獄に入れられ、チャールズは「陰気で何も無いところ」と述べている部屋を間借りすることになる。⁶ 彼はとても寂しかったので、マーシャルシー監獄の近くのラント・ストリートに屋根裏部屋を見つけてもらう。そのお蔭で家族と一緒に朝食と夕食を取ることができるようになった。

家族はマーシャルシー監獄に3か月住んだが、下層階級の労働をしなければならなかったことに加えて、この屈辱は若いチャールズ・ディケンズに消えることのない強烈な印象を与えた。父親はついにはチャールズを再び学校に行かせることができるようになり、彼は15歳まで学校に通った。その後、事務弁護

士の事務所で2年間働いたが、仕事は好きになれなかった。彼は速記を習い、民法博士会館で自由契約のレポーターとしての新しい仕事を始めた。そのことが、彼を著作の道へと導くことになるのである。ディケンズがロンドンの暮らしのいかがわしい一面を直接に目撃したのは、このような人格を形成する時期であった。この経験によって彼は社会改良に興味を持ち、ついには、ユレーニア・コテッジの設立と経営に関わることになる。

ディケンズはマライア・ビードネルという若い女性と初めて恋に落ちるが、求婚は失敗に終わる。後に彼はキャサリン・ホガースと出会い、1836年4月2日に結婚する。二人には10人の子どもが生まれ（娘が一人亡くなる）、長男のチャーリーはアンジェラ・バーデット・クーツの息子のような存在になり、彼女はチャーリーのためにイートン校の教育費を支払っている。1845年に、チャールズ・ディケンズは『マーティン・チャズルウィット』を彼女に献上している。ディケンズはそうのように大家族を持っていたにもかかわらず、結婚生活はあまり幸せなものとはいえず、1858年の離婚は大きなスキャンダルとなった。ミス・クーツは非常に心を痛めて離婚に反対し、二人を和解させようと試みたが無駄であった。その後、彼とミス・クーツはそれまでと同様に共同して働くことはなかった。ディケンズは若い女優のエレン・ターナンに夢中になり、資金を出してペックナムのリンデン・グローブに家を構えさせた。

ディケンズは、1870年6月9日、ケントのギャズ・ヒル・プレイスの家で脳卒中のために亡くなり、ウェストminster寺院に埋葬された。

ディケンズは自分のまわりで見た現実の生活や人物を小説に描いた。彼の更生施設に収容された人々もまたその素材となっている。

入所者の一人であるイザベラ・ゴードンは、伝えられるところによると、極めて手に負えない人物だったようだ。1849年8月12日に、彼はイザベラを追いつ出すことになるだろうとアンジェラ・クーツに宛てた手紙に書いている。ディケンズは家政婦長のモーソン夫人に、もしそのようになれば、「彼女の出て行く様子を正確に」伝えてくれるように頼んだ。彼は「特別な理由」があって、

「彼女の振る舞いを観察してほしい」と言っている。

イザベラはその時は猶予されたようだが、再びトラブルを起こすのにそれほど長くはかからなかった。今回こそ彼女は出ていかざるを得なかった。ディケンズはホームで開かれた委員会に参加していて、自分の目で彼女を観察することができた。

イザベラは別の2人の女と共謀して、家政婦長への非難をでっち上げたが、それを委員会は「まったくの偽りで悪意がある」と認めた。

その事件が審議されている間、彼女は自分の部屋にいるように命じられたが、「舞踏会でレディがするようにスカートを揃んで、モーソン夫人の前を踊りながら階段を上がっていった」。その後、彼女は一階に呼ばれて、ホームを出ていくように言われた。

その決定はホーム全体を驚かせ、悲しませた。それは11月で、すでに外は暗くなっていた。少女は、一夜の宿泊代として半クラウン貨と、他に衣服をもっていないかったので、粗末なショールを与えられた。

ディケンズは彼女の出て行く様子をこのように描写している。

「若い女は、今や本当にこのようなことになってしまったので、泣き叫び、頭をうなだれた。戸口から出ると、彼女は立ち止まり、門のところに行く前に、1、2分のあいだ家に寄りかかっていたが、この上なく惨めで不幸な様子だった」。「その後、私たちはショールで顔を拭きながらゆっくりと立ち去る彼女を路地のところで追いついた」。

ディケンズがモーソン夫人に最初に依頼した「特別な理由」は明らかである。

ディケンズは当時、『ディヴィッド・コッパーフィールド』の月刊の一分冊を書いていたが、この事件の後すぐに、現在の版の第22章となっている、「懐かしい光景と新しい人たち」という章を書いた。彼は登場人物の一人であるマーサ・エンデルの悲惨と恥辱の生活への旅立ちを、これと非常によく似た言い回しで物語っているのである。

「そしてマーサは立ち上がって、ショールを身に巻き顔を覆うと、声をあげて泣きながら、ゆっくり戸口の方へ進んでいった。出ていく前に、何か言おうとしたのか、それとも引き返そうとしたのか、一瞬立ち止まったが、彼女の口から一言も発せられることはなかった。」

興味深いことに、『ディヴィッド・コッパーフィールド』のマーサ・エンデルは、移住することになる（第57章「移民」参照）。それはイザベラ・ゴードンに降りかかった運命とは少し違うものだが、彼女に最初に計画されていたのが海外移住であった。

ロンドンの売春婦

ディケンズの生きた時代は、賃金を得ることのできる女性の仕事はきわめて少なかった。扶養してくれる家族も夫もない女性にとって、将来の見通しは全く暗いものであった。ある18世紀の作家は、貧民救済を目的とする救貧法を、継ぎはぎのためにまだら模様になった貧民の衣服になぞらえてパッチワークと評した。その一世紀後には、貧民救済に関する130の国会制定法があったと言われている。院外救済（居宅で現金が直接支給される）は止むを得ない場合に認められてはいたが、一般的には救済は恐るべき非情な管理体制に置かれたワークハウスに収容されることを意味していた。

そのため、多くの女性には売春と軽犯罪が生き延びるための唯一の方法と思われた。そのような生活の末、更生施設に一時収容されることがよくあった。

ミス・クーツへの手紙で、ディケンズは「刑務所を出た貧しく若い女」について述べている。「私たちが抱えている別のケースと同じく、彼女は若い時にその道に入ってしまったが、それ以外にどうすることもできなかったのです。このような不運な女性たちになぜ何の機会も選択肢も与えられていないのか、と考えるのも恐ろしいことです。もし彼女たちのうちの数人でも現状から救われていたとしたら、それは社会の驚くべき奇跡だっただろう、という残酷

な事実から目をそらすことはできません」と書いている。

『ロンドンの労働とロンドンの貧民』の作者であるヘンリー・メイヒューは、ロンドンだけでも80,000人以上の売春婦がいたと推定している。

ユレーニア・コテッジの運営

「経験を積んだ数人の紳士たちで構成する」委員会は月に一度開かれ、会計監査をしたり、報告を受けたり、ホームの運営全般について話し合ったりした。委員会にはコールドバス・フィールズ刑務所の所長である G. L. チェスタトン、ウェストミンスター・トットヒル・フィーズ刑務所の所長補佐であるオーガスタス・トレイシーが含まれていて、この二人は、自分たちの刑務所からホームにふさわしい若い女性を推薦した。彼らは、1848年1月に、ユレーニア・コテッジが「裁かれて投獄された経験がない若い女性たちも数人受け入れるべきである」と提案した。「両者が混じり合うことがホームの健全な運営に必要」と考えたからであった。委員会ではすべての収容者の一人ひとりと面接をすることになっていた。ホームの中では彼女たちの経歴について触れられることは決してなかった。実際、ディケンズはミス・カンリフというスタッフがイザベラ・ゴードンに前歴を聞き出そうとしていたのを知って非常に怒った。

ホールズワース夫人は最初の家政婦長で、やがてモーソン夫人とマーチモント夫人に引き継がれた。

ホールズワース夫人を手伝っていたのがフィッシャー夫人であった。家政婦長の補佐を務めるのは若い人のほうがよいということになっていた。フィッシャー夫人は26歳で、「この事業にとっても興味を持ち、温厚で親切な態度で若い人々を教育することに慣れていた」。当時、一日おきの夕方にホームを訪ねていたディケンズは、1847年11月20日のミス・クーツ宛ての手紙で、フィッシャー夫人について次のように書いている。「彼女が初めて当番となった夜の皆の勉強ぶりをお見せしたかったです。彼女が飼っていたカナリアがテーブルのあたりを歩きまわる中を、二人の少女は私の作った教科書に夢中になり、そ

こからあらゆる知識を得ることに没頭していたのです」。

しかし残念ながら、たった1か月後の12月29日にディケンズは、アンジェラ・クーツに宛てて再びフィッシャー夫人について手紙を書くことになる。ディケンズの希望に反してミス・クーツは彼女を解雇したのである。「彼女の離脱が非常に残念でならないとしか言いようがありませんし、その理由は私にはとてもつらいものです」。フィッシャー夫人が非国教徒であることを隠していたのが理由だった。ミス・クーツは夫人が非国教徒であることに異議があったわけではないが、契約の時にその事実を隠していたことを問題にしたのである。それで彼女は出て行かなければならなかった。

フィッシャー夫人が辞した土曜日に、グレーズ夫人が到着した。ディケンズは、彼女の「気難しい上流気取りが心配ですし、表情も陰気です」と述べ、1848年5月23日には「グレーズ夫人は理由もなく歩かずにおれないので、他の誰もが彼女の後について歩かなければならなくなるのだという印象を受けました」と書いている。

1848年8月13日に、彼は二人の夫人についてこのように書いている。「グレーズ夫人とホールズワース夫人を鎖でつないでおいてほしいものです。我慢しながら重労働をしている、という体の奥方様たちから、上品ぶった偉そうな態度を見せられるのはまっぴらです。ホールズワース夫人が私に異議を唱え始める時の顔を、あなたに描いて見せたいほどです」。ディケンズは最初はホールズワース夫人について不信感を持っており、「彼女は、自分が受け持って面倒を見ている若い女は自分の敵だと心の奥底で思っているようです」と書いていた。しかし後に彼は「そういうつもりはないのに」彼女を好むようになった。

他にもそのような人がいた。ミス・カンリフはディケンズに最初良い印象を与えていたが、1849年1月27日付では、「彼女が残酷な気質の女性であることは、確信をもって言えます」と書き、2月5日には、「私は土曜日にホームにいましたが、ミス・カンリフは家庭劇に登場する芝居マニアのように思えま

す」と書いている。後になって、「ミス・カンリフは（出て行くのだからどうでもいいとはいえ）、彼女（イザベラ・ゴードン）の過去の生活について本人に聞き出そうとしていたのです」と書き、3月までにディケンズは、「私がホームにいた時、ミス・カンリフが一頭立て貸馬車（一種の貸馬車）に乗って、非常にもったいぶった態度で自分から出て行った」ため、ホームは再びすべてがうまくいき始めたが、出て行った様子から彼女は「やっぱり芝居マニアだと思った」と書いている。

ミス・ファーズもその例である。ディケンズは彼女が「ナツメグおろし器のように、自分の仕事は少女たちを削ったりヤスリをかけたりにして、形を整えることだと思っています」と書いている。

モーソン夫人は「まさしく私たちがずっと待ち望んでいた人」で、1849年3月頃からホームで働いている。その当時、もう一人の家政婦長はマッカートニー夫人であった。1854年にモーソン夫人は再婚のためにホームを去った。彼女のかわりにマーチモント夫人が来たが、彼女は「モーソン夫人のような明るさが全くなく、平凡な顔立ちで気が利かない」と好意的ではない描写がされている。しかし、マーチモント夫人は内に秘めた自負心を持っており、委員で刑務所長のトレイシー氏は、彼女はきつとうまくやっていけよう、と確信していた。

ハウスの運営上の問題が頻繁に言及されているが、全体としては順調に進んでいた。1856年5月27日にディケンズは、「ブッシュで委員会を開きましたが、すべてうまく運んでいます」と書き、1857年の7月には、「シェパーズ・ブッシュにて、水曜日、すべて順調です。何の苦情も問題点もありません」と記している。

訳注

この抄訳のテキストは、Pamela Janes, *Shepherd's Bush. . . . The Dickens Connection (The Story of Urania Cottage: Home for Fallen Women in Lime Grove, Shepherd's Bush)*, Shepherd's Bush Local History Society, 1992. である。

- 1 『女性の使命』は1892年にバーデット・クーツが構想し、翌年のシカゴ万国博覧会に出展された。(Arranged and Edited by, with Preface and Notes by The Baroness Burdett-Coutts, *Woman's Mission; A Series of Congress Papers on the Philanthropic Work of Women, by Eminent Writers.*, New York and London, 1893. 2013年に Cambridge Library Collection として復刻され、また現在以下の URL に全文公開されている。https://archive.org/details/womansmissionser00burdiala)
- 2 バーデット・クーツの伝記の主なものは次の2冊である。
 - ①Diana Orton, *Made of Gold: A Biography of Angela Burdett Coutts*, Hamish Hamilton, 1980.
 - ②Edna Healey, *Lady Unknown: The Life of Angela Burdett-Coutts*, Sidgwick and Jackson, 1978.
ディケンズとユレーニア・コテッジについての最近の研究書として以下のものがある。
 - ③Jenny Hartley, *Charles Dickens and the House of Fallen Women*, London: Methuen, 2008.
- 3 ディケンズの手紙はいくつもの版で出版されているが、ここでは、以下の版を参考にした。
 - ①*The Pilgrim Edition, The Letters of Charles Dickens, Vols.1-12.*, Oxford University Press.
 - ②Edgar Johnson ed. *Letters From Charles Dickens to Angela Burdett-Coutts, 1841-1865.*, London: Jonathan Cape, 1953.

- 4 原文には1847年5月となっているが、初めてホームについて触れられるのは1846年5月26日のディケンズからバーデット-クーツに宛てた手紙である。*The Pilgrim Edition, Volume 4 (1844-1846)*, 1977. 552-556.
- 5 末尾の「教区税記録」参照。
- 6 原文には1823年とあるが、父親のジョン・ディケンズが負債のためにマーシャルシー監獄に収監されたのは、1824年2月20日から5月28日までである。

*1853年の教区税記録より、ライム・グローブの所有権の詳細：アクスブリッジ・ロードからニュー・ロード（現在のゴールドホーク・ロード）まで
 教区税 課税請求額

No.

1821年 家屋と土地 0ポンド5シリング0ペニー

1822年 庭

土地所有者：シッチ J&H

借地人：ジョン・テイラー

1815年 家屋と庭 1ポンド5シリング0ペニー

1816年 庭

土地所有者：ブライドウェル アンド ベスレヘム病院院長

借地人：ベンジャミン・ホール

1818年 耕地と一部牧草地 1ポンド6シリング0ペニー

1819年 荒地、池と一部庭

1817年 家屋と庭

土地所有者：エリザベス・スコット

1790年 家屋と納屋

1791年 柳の林、池と一部庭 1ポンド7シリング0ペニー

1791A年 レンガ再生工場

土地所有者：クリスティアナ、アンジェリーナ、ジュリエット・
 スタインバーグ

借地人：上記の者

The first half of *Shepherd's Bush*. . . . *The Dickens'*
Connection by Pamela Janes

Kiiko Nagaoka

Among the numerous female philanthropists in Victorian England, Angela Burdett-Coutts is famous not only for her various kinds of charity work but also for her connection with Charles Dickens. They cooperated to improve the lives of the poor, and Urania Cottage, a home for fallen women, was the project into which they poured their souls into the most.

This booklet is “an expansion of a lecture given by Pamela Janes of the Shepherd's Bush Local History Society at the West London Local History Conference”, and includes important information such as the title record of property in Lime Grove from 1791 to 1821 and a list of the occupants of Urania Cottage taken from the 1861 census. Until now several biographies of Burdett-Coutts and innumerable biographies of Charles Dickens have been published, and the novelist's involvement with Urania Cottage has already been much discussed. The present leaflet will contribute to furthering Dickens' studies, both as a unique and compact guide to the local history surrounding the House and as a research work on the Dickens' view on people in desperate need.

大阪学院大学外国語学会会則

- 第1条 本会は大坂学院大学外国語学会と称する。
- 第2条 本会の事務所は大坂学院大学図書館内におく。
- 第3条 本会は本学の設立の趣旨にもとづいて、外国語学、外国文学の研究を通じて学界の発展に寄与することを目的とする。
- 第4条 本会は次の事業を行う。
1. 機関誌「大阪学院大学外国語論集」の発行
 2. 研究会、講演会および討論会の開催
 3. その他本会の目的を達成するために必要な事業
- 第5条 本会の会員は次の通りとする。
1. 大阪学院大学・大阪学院大学短期大学部の専任教員で外国語学、外国文学を専攻し担当する者
 2. 本会の趣旨に賛同し、役員会の承認を得た者
- 第6条 会員は本会の機関誌その他の刊行物の配布を受けることができる。
- 第7条 本会には次の役員をおく。任期は2年とし、再選は2期までとする。
1. 会 長 1名
 2. 副 会 長 1名
 3. 庶務・編集委員 4名
- 第8条 会長は会員の中から選出し、総長が委嘱する。
副会長は会長が会員の中から委嘱する。
委員は会員の互選にもとづいて会長が委嘱する。
- 第9条 会長は本会を代表し、会務を統轄する。
副会長は会長を補佐する。役員は役員会を構成し、本会の企画・運営にあたる。
- 第10条 会長は役員会を招集して、その議長となる。
- 第11条 会長は会務執行に必要なとき、会員の中から実行委員を委嘱するこ

とがある。

第12条 総会は年1回これを開く。ただし、必要あるときは会長が臨時に招集することができる。

第13条 本会の経費は大阪学院大学からの交付金のほかに、有志からの寄付金その他の収入をもってあてる。

第14条 各学会の相互の連絡調整をはかるため「大阪学院大学学会連合」をおく。

本連合に関する規程は別に定める。

第15条 会計は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。

第16条 本会会則の改正は総会の議を経て総長の承認をうるものとする。

附 則

1. この会則は、昭和49年10月1日から施行する。
2. この会則は、平成3年4月1日から改正し施行する。
3. この会則は、平成13年4月1日から改正し施行する。
4. この会則は、平成24年4月1日から改正し施行する。
5. この会則は、平成25年4月1日から改正し施行する。

以上

大阪学院大学外国語論集投稿規程

1. 投稿論文（翻訳を含む）は外国語学、外国文学に関するもので未発表のものであること。
2. 投稿資格
 - イ. 投稿者は、原則として本会の会員に限る。
 - ロ. 会員外の投稿は役員会の承認を必要とする。
3. 原稿は次のように区分し、その順序にしたがって編集する。論説、研究ノート、翻訳、書評など。
4. 原稿用紙は、本学の200字詰用紙を横書きにし、枚数は原則として80枚を限度とする。

ワードプロセッサ使用の場合は、A4判用紙を使用し、1ページを35字×27行とし、16枚程度までとする。

外国語文の場合はA4判用紙を使用し、5,000語程度までとする。

論文本文が日本語文の場合は300語以内の外国語文の、また本文が外国語文の場合は900字以内の日本語文の、概要を付ける。

外国語による論文および概要は、投稿前に当該外国語母語話者によるチェックを受けることが望ましい。
5. 発行は原則として、前期・後期の2回とし、6月・12月とする。年間ページ数は300ページ以内とする。
6. 抜刷は40部を無料進呈し、40部を超過希望の場合は編集委員会で超過費用を決定する。
7. 投稿され掲載された成果物の著作権は、著作者が保持する。

なお、出版権、頒布権については大学が保持するため、論文転載を希望する場合は、学会宛に転載許可願を提出願うこととする。
8. 投稿された論文の著作者は、当該論文を電子化により公開することについて、複製権および公衆送信権を大学に許諾したものとみなす。大学が、複製権および公衆送信権を第三者に委託した場合も同様とする。

この規程は、平成25年4月1日から適用する。

以 上

大阪学院大学外国語論集執筆要領

1. 原稿は最終的な正本とする。校正の段階でページ替えとなる加筆をしない。
2. 欧文は1行あきにタイプすること。
3. 邦文原稿の挿入欧文は、タイプもしくは活字体で明瞭に書くこと。
4. できるだけ現代かなづかいと当用漢字を用い、難字使用の時は欄外に大書する。
5. 印刷字体やその他印刷上のスタイルについては、編集委員に一任する。
6. 注はまとめて本文の末尾に置くこと。

インデックス番号は上つきとして通しナンバーとする。その他の書式については、会員が所属する学外の学会の規程に準ずるものとする。(例えば、英文原稿の場合は、*MLA Hand book for Writers of Research Papers* に準拠すること。)
7. 図や表の必要の場合は別紙に書いて1枚ごとに番号と執筆者名を記入し、本文中の挿入箇所を指示すること。説明文は別紙にまとめる。
8. 自分でスミ入れして完成させた原図や写真の場合は厚手の台紙にはりつけて、希望の縮尺を記入すること。
9. 執筆者校正は3校までとし朱筆のこと。3校以前で校了してもよい。
10. 次の場合は、必要経費の一部が執筆者負担となることがあるのでとくに注意されたい。
 - ア. 校正のさい、内容に大きな変更は認められないが、やむをえず行って組換料が生じたとき。
 - イ. 特殊な印刷などによって通常の印刷費をひどく上まわる場合。
11. 原稿の提出期限は原則として9月末と3月末とする。
12. 原稿の提出先は編集委員あるいは図書館とする。
13. 原稿提出票を必ず添付する。原稿用紙と提出票は図書館事務室に申し入れる。

以 上

執筆者紹介（掲載順）

黒 宮 公 彦 情報学部 准教授

永 岡 規 伊 子 短期大学部 教授

編集後記

今回70号という一つの節目を迎えた。書棚に並んだ論集を眺めると、一冊一冊に歴史を感じずにはいられない。ご多忙中、会長の熱意（会長ご自身としては、尻たたき、恁喝、懇願と記載してほしいとのこと）に応じて投稿して下さった執筆者の方々に心よりお礼を申し上げたい。

前号から本論集は電子化され、印刷物の形態としては抜き刷りのみになった。本の形に慣れ親しんだものとしては、『外国語論集』と印字された CD-R には複雑な思いである。最新号の薄緑色の表紙がモニターでしか見られないのは寂しい。だが、嘆いていてもしかたがない。学術機関リポジトリにより、無償で公開され、多くの方々に読んでいただけるようになった。それは同時に、読者諸氏に厳しく評価していただくことでもある。評価に耐えられるよう、なおいっそう気を引き締めて研究に取り組んでいきたい。

以前は合併号という形もあったが、会員数の減少にもかかわらず、ここ数年順調に年2回の発行が続いている。次号に向け、みなさんのご投稿を切に願います。

(O. Y.)

大阪学院大学外国語学会役員

会 長 長岡みゆき

副 会 長 黒宮 公彦

編集・庶務委員 笹間史子・永岡規伊子・山口 修・吉村京子

大阪学院大学外国語論集 第70号

平成27年12月20日 印刷 編集発行所 大阪学院大学外国語学会

平成27年12月30日 発行 〒564-8511 大阪府吹田市岸部南二丁目36番1号

電話 (06) 6381-8434 (代)

発 行 人 長 岡 みゆき

印 刷 所 大 枝 印 刷 株 式 会 社

吹 田 市 元 町 28 番 7 号

電話 (06) 6381-3395 (代)

OSAKA GAKUIN UNIVERSITY

FOREIGN LINGUISTIC AND LITERARY STUDIES

No. 70

A Collocation-based Approach to Prepositions
..... Kimihiko Kuromiya 1

Translation and Commentary
The first half of *Shepherd's Bush*. . . . *The Dickens'*
Connection by Pamela Janes
..... Kiiko Nagaoka 25

December 2015

THE FOREIGN LANGUAGE SOCIETY
OSAKA GAKUIN UNIVERSITY